

論文の要旨

本稿は William Charles Macready の日記や Charles Dickens の書簡、そして、伝記類等に窺われる Macready 像を中心に、彼というフィルターを通して垣間見える Dickens 像の一部を確認するとともに、この二人と John Forster の三者三様の人間性が交差した結果生じた、衝撃波とも言うべきものの有り様を検証することを目的とした。

誰とでも喧嘩の出来た Macready が、唯一 Dickens だけを例外としたという意見がある。しかし Macready の芸術に携わる先輩としての自負と、Dickens の一流作家としての自負とがぶつかり合った結果、二人の心の奥底には表面にあるものとはまた違った何ものかが生まれていた。独断的で議論好きの Forster がその二人と係ることによって、事態は攪乱され、複雑な三角関係の如きものを形成することとなった。

Macready と Dickens、そして、Forster

山崎 勉

(序)

1837年6月16日、Haymarket 劇場で Othello 役を演じ終えたばかりの William Charles Macready (1793-1873) は、友人 John Forster (1812-1876) を介して 19 歳年下の Boz、即ち、Charles Dickens (1812-1870) と初めて顔を合わせ、その日の日記に「(Dickens)と会えて嬉しかった」(“I was glad to see [Dickens]”) と記している (Dia. 1: 399)。Dickens は月刊分冊で当時発表中の *The Pickwick Papers* により、一躍文壇の寵児となった 25 歳の新進作家であり、Macready の方は 1825 年頃から「あの著名な悲劇役者 Macready 氏」(“That Eminent Tragedian, Mr. Macready”) と、世間でもてはやされている 44 歳のベテラン役者だった (Downer 102-03)。この二人の出会いは 1833 年に Macready の知己を得た後、1836 年暮れに Dickens と初めて出会った

Forster の、卓越した才能を持つ者同士を引き合わせたいという意欲の一所産と言える (*Dia.* 1: 36&n; Davies 158)。

本稿は Macready の日記や Dickens の書簡、そして、伝記類等に窺われる Macready 像を中心に、彼というフィルターを通して垣間見える Dickens 像の一部を確認するとともに、この二人と Forster の三者三様の人間性が交差した結果生じた、衝撃波とも言うべきものの有り様を検証することを目的とする。

Macready の日記の編纂者 William Toynbee は編注内で、Macready は他の同業者達の目には「厳格」(“austere”) で「傲慢」(“high-handed”) な人間に見えたために、仲間内では「まことに不人気」(“far from being popular”) だったと指摘し (*Dia.* 2: 127n)、Sidney P. Moss は、誰とでも喧嘩の出来た Macready だったが、唯一 Dickens だけは例外だったと述べている (122-23)。確かに Macready は彼と Dickens とを結び付けた Forster とは、お互いに腹の裡を曝け出して、何度もぶつかり合いと和解を繰り返していたが、彼の日記や Dickens の書簡等には二人 (Macready と Dickens) が同様な形で不和に陥っている形跡はない。それで事は終わりかということ、どうもそうではないらしい。Macready と Dickens、特に Macready の心の奥底には、表面にあるものとはまた違った何ものかがいくらか潜んでいたようだ。

(1)

この章では Macready の略歴と絡ませて、彼の性格の裡でも最も顕著な側面に一考を施しておきたい。その側面とは Toynbee が指摘した、同業者達には「傲慢」とも思えた彼の「厳格」さだ。

1833 年から舞台俳優としての現役を引退する 1851 年まで綴り続けられた Macready の日記には、役者という生業の社会的地位を向上させたいという強い想い、そして、その目的達成に向けた彼の奮闘の足跡がくっきりと残されている。彼のこの想いと奮闘とが同業者達への彼の姿勢と少なからず結び付いているのだ。例えば、1835 年 6 月 15 日付の *Spectator* の記事

の裡に、演劇が「浮浪者の生業」(“the vagabond’s trade”) だという文言を見出した Macready は憤慨しているし (*Dia.* 1: 234 [1835 年 6 月 15 日付])、1837 年 5 月 7 日付の彼の日記には役者が軽蔑されていることへの言及がなされている (*Dia.* 1: 392)。また、政治家や軍人に比して芸術家の功績が世に認められることが少ないこと (*Dia.* 1: 463 [1838 年 6 月 12 日付])、そして、その必然的帰結としての経済力の弱さへの彼の慨嘆 (*Dia.* 2: 349-50 [1846 年 11 月 24 日付], 359 [1847 年 3 月 13 日付])、さらに、社会における自らの「心許ない立場」(“uncertain position”) に起因する圧迫感が彼にもたらした苦悩のことも、彼の日記に窺われる (*Dia.* 2: 295 [1845 年 5 月 20 日付])。

Dickens が Macready 宛の書簡で、Drury Lane 劇場のサルーンの腐敗した状況を改善するための方策(例えば、淑女の社交の場でもあるサルーンで男どもにうろうろさせない方が良いといった)を授けたのは (*Letters* 2: 454 [1841 年 12 月 28 日付])、演劇の品性を高めることを目指す Macready のその問題解決への情熱に感化された上でのものだ。現に Macready は改善策を施した後、*John Bull* 紙に掲載された不平に答える形で、売春婦達を隔離すべく彼女等専用の階段とギャラリーとを設けたことを、1842 年 1 月 31 日付の *Times* 紙への投稿文(Forster が代筆)で説明している (*Dia.* 2: 155 [1842 年 1 月 30 日付]; *Letters* 2: 454n)。

演劇の品性ということと関連してもう一つ見逃がすことの出来ない事柄がある。それは、役者、そして、座頭として経済的に破綻した女好きの父親 (William McCready) を反面教師として(Downer 15, 43, 55)、Macready が 1852 年に死別することになる妻 Catherine の生前には(彼は 1860 年に再婚)、他の女性に対して極めて潔癖な態度を取っていたことだ。女性に纏わる誘惑の多い職業(役者)に就いているものの自分が評判を落とすことがなかったのは、「子供達のためにも高潔でリスペクタブルな品位を自らに維持したいという願望」(“my desire of upholding in myself and for my children a respectable as well as honourable character”) を持ち続けたが故

のことだ、と Macready は述懐している (*Dia.* 1: 12-13 [1833 年 2 月 19 日付])。論より証拠、1840 年 6 月 26 日付、そして、7 月 2 日付と 9 日付の日記には、彼が若い女優 Helen Faucit の猛烈なアタックを如何に回避しようかと、苦心惨憺している様子が描かれている (*Dia.* 2: 66, 67, 68-69)。読む者の失笑すら買いかねないその色男ぶりに、どちらかといえば醜男だった生身の彼の姿を垣間見ることが出来る (*Dia.* 1: 5n; Downer 40)。

Macready の父親の経済的破綻ということを上述べたが、父親の債務者監獄入獄 (Lancaster Castle と思われる - *Dia.* 2: 292&n [1845 年 4 月 6 日付]) にまで到った 1809 年 11 月に起きたこの出来事が (もともと、この父親は後に再度破産することになるが [Downer 55])、Macready を舞台に上げる契機となったことは周知の事実だ。名門 Rugby 校の生徒だった彼は 1808 年に休暇でその学校を離れた後、二度とそこに戻ることなく父親の仕事 (座頭) を継承し、1810 年に Birmingham の舞台で役者デビュー (*Romeo and Juliet* の Romeo 役) した後 (Downer 15, 18)、1851 年に舞台を降りるまでその稼業を続けた。Rugby 校の生徒だった頃の彼は役者になることを嫌い、Oxford 大学で学んだ後に弁護士になることを夢見ていたのだが、その夢は脆くも潰えた (Downer 17)。

London の Covent Garden 劇場の舞台に初めて立った頃 (1816 年 9 月 16 日) の Macready は既に腕を上げ、William Hazlitt に依れば、「(Edmund) Kean を除けば . . . 当代一と言える悲劇役者」(“by far the best tragic actor . . . with the exception of [Edmund] Kean”) になっていた (qtd. in Downer 47)。勿論それは、役者として生きようと決断した彼の不断の努力と生来の才能の賜物だった (Downer 18, 24, 28-29 et passim)。その彼の不断の努力の一環として看過出来ないのが、「レパートリー・システム」(“repertory system”)、つまり、ロングランでなくレパートリーの中の演目を次々と上演する形式や、「専属劇団」(“the stock company”) 方式への執着と改革である。そしてさらに重要な改革は、多くの同業者達が大大掛けのスペクタクルを呼び物とする「きわもの」(“catchpenny”) で客を惹き付けようとしていた時代に、

彼は「正統劇」(“the legitimate drama”)に固執するとともに(Downer 2 et passim)、「原版」(“the original text”)による Shakespeare 劇を大々的に復活させようと努力したことだ。例えば彼は当時としては異例の道化を *King Lear* に登場させているし(Downer 170)、1838年10月の *The Tempest* 上演の際には、John Dryden 等により過去に書き加えられた部分を削除している(Downer 178)。

演劇の向上のために Macready が腐心したのは、勿論上述したような改革のみではなかった。彼が1833年5月28日付の日記で、その日の自分の演技(Hamlet 役)を一幕ごとに振り返って駄目だしをしていることから察せられるように(*Dia.* 1: 37-38)、彼は舞台の中心人物としての自らの演技に対して常に厳しい目を向け、反省に反省を重ねていた。演技に苦悩する彼の姿を髣髴とさせる日記中の文言は枚挙に遑がない(*Dia.* 1: 1-2 [1833年1月2日付], 2-3 [1833年1月4日付], 4 [1833年1月7日付] et passim)。自らの演技に対してこのような姿勢を採っていたので、彼は他の役者達の演技に拙劣さを見出した時には極めて強い言葉でそれを叱責した。1833年9月11日付の彼の日記には、リハーサル中に間をはずした役者に雷を落としたことが記されているが(*Dia.* 1: 61-62)、この類のエピソードもまた彼の日記の到る所に見出すことが出来る(*Dia.* 1: 81 [1833年12月2日付], 110 [1834年3月4日付], 131 [1834年5月7日付] et passim)。

以上概説した Macready の慨嘆と苦悩と努力の逆反射として、出自の低さを曝け出して憚らない一部の同業者達の実態への苦々しい想いが醸成され、彼等への「傲慢」とも見える「厳格」な姿勢となって発現したのだ(*Dia.* 1: 106&n-1834年2月14日付)。しかし彼の内心に己を冷静に客観視する眼が、常に備わっていたことを付け加えておかなければならない。癩癩を起こした日の日記で、彼が激情と不寛容さを自分の短所として反省することしきりだったのも(*Dia.* 1: 81 [1833年12月2日付], 110 [1834年3月4日付], 131 [1834年5月7日付] et passim)、それ故のことだった。

上述のように、自分の性急な行為のことで繰り返し反省していた Mac-

ready だったが、彼の痼癩ということでも紹介せざるを得ないもう一つのエピソードがある。それは Alfred Bunn (当時 Drury Lane 劇場のマネージャー) とのことだ。日頃から「下司な悪党」(“[the] base scoundrel”) とか「卑劣な奴」(“a reptile”) と Macready が酷評していた Bunn が (*Dia.* 1: 293 [1836 年 4 月 16 日付], 301 [同年 4 月 28 日付])、*Richard III* の最初の 3 幕だけの興行を強制して役者達のプライドを傷付けるとともに (*Dia.* 1: 299-300 [1836 年 4 月 27 日付], 300 [同年 4 月 28 日付])、一方的に彼等の報酬を引き下げようとしたために堪忍袋の緒が切れ (*Dia.* 1: 287 [同年 3 月 12 日付], 299 [同年 4 月 25 日付])、彼は 1836 年 4 月 29 日に *Richard* 三世役を演じた後で Bunn の部屋を訪れ、彼を殴り倒した (*Dia.* 1: 302-03 [1836 年 4 月 29 日付])。Macready は当然 Bunn に告訴され、150 ポンドの金を払わされることになる (*Dia.* 1: 332 [1836 年 6 月 30 日付])。事件直後、裁判中、そして、裁判後に彼が猛省したことは言うに及ばない (*Dia.* 1: 304-05 [1836 年 5 月 1 日付], 308 [同年 5 月 5 日付], 317 [同年 5 月 20 日付] et passim) 。もっとも彼はその後、Bunn 側の弁護士 Frederick Thesiger への報復を誓い (*Dia.* 1: 376 [1837 年 3 月 3 日付])、Bunn 自身に対しては相変わらずの姿勢を保持した次第だが (*Dia.* 1: 341 [1836 年 8 月 9 日付], 356 [同年 11 月 3 日付], 360 [同年 11 月 18 日付] et passim) 。

(2)

Thesiger への報復を決意して間もない頃、Macready は初めて Dickens と出会っている。本稿の冒頭で紹介したように、Macready は Dickens (そして、Forster) よりも 19 歳年上だった訳だが、彼の年下の者への姿勢ということで興味深いエピソードがある。彼は 1846 年 6 月 4 日付の日記に、9 年前 (1837 年) にはその劇作品 (*Strafford*) を舞台に掛けるのに尽力したこともある (*Dia.* 1: 391-92 [1837 年 5 月 1 日付], 392 [同年 5 月 2 日付])、Robert Browning (1812-1889) と舞踏会で出会ったが彼の方から声を掛けて来るともなかったと記した後で、「あの青二才」(“the puppy”) と Browning のこ

と呼んでいる (*Dia.* 2: 340 [1846年6月4日付])。1843年に Browning 作の *The Blot on the 'Scutcheon* で味噌がついた後二人が疎遠になっていたこと (*Dia.* 2: 195 [1843年2月8日付], 196 [同年2月10日付と2月11日付], 198 [同年3月18日付])、そして、Browning が未だ文人としての名声を勝ち得ていなかったことが、このエピソードの背景にある。しかし、Browning を「青二才」と呼んだ Macready が、彼 (Browning) と同年齢の Dickens や Forster に対して採ったスタンスの底流にあるものが、このエピソードには垣間見える。それは芸術に携わる先輩としての自負と意地だった。

先輩としての Macready の自負と意地が激しく噴出したもう一つの例としては、1846年2月の Forster とのことがある。戯曲 *Oedipus Tyrannus* (彼等の共通の友人 Bulwer-Lytton 作) に関わる Princess's Theatre のマネージャー (Maddox) との取引が流れそうになった時、その責任を自分に擦り付けようとする Forster に心証を害された Macready は、「私にそんな口の利き方をして欲しくはない」 (“I would not be spoken to in that manner”) と、彼にきっぱりと言っている (*Dia.* 2: 323 [1846年2月14日付])。Macready と劇作家や劇場のマネージャー等との間を何度も仲介した Forster だったが (*Dia.* 1: 275-76 [1836年2月11日付], 369 [1837年1月4日付]; *Dia.* 2: 299-300 [1845年7月30日付] et passim)、Macready は彼が能力以上のことを引き受けながら、ぞんざいな仕事しか出来ない取り引き下手だと考えていた (*Dia.* 2: 300 [1845年8月1日付], 389 [1848年5月9日付], 493 [1851年2月13日付])。Forster は、Macready の演技についての評論を彼の引退後に執筆する意欲を示して、彼を喜ばせたことがある (*Dia.* 1: 360 [1836年11月16日付])。彼が Macready の契約交渉のために走り回った一因が、そのような意欲と関わりがあったことは明白だ。しかしその意欲の故に、彼の Macready への接近度が Dickens と較べて圧倒的に高く、おまけに彼の生来の攻撃的性格も仇となって、彼への Macready の批判が過激なものになったようだ。¹

上段の Forster の口の利き方に関するエピソードの前後に Macready が陥っていた心境を検証すると、興味深い事実が見えて来る。そのエピソードより 1 年半程後、そして、舞台からの引退時より 3 年 9 ヶ月程前の 1847 年 5 月 24 日付の日記で、Macready は自分が「若々しい活力と柔軟性」(“my youthful vigour and elasticity”) を喪失したことを告白している (*Dia.* 2: 366-67 [1847 年 5 月 24 日付])。その時彼は 54 歳の初老の男 (彼は 1793 年 3 月 3 日に誕生) になっていた。筆者がこの告白の内容を重視する理由は、恐らく 1 年半程前には既に彼が、その内容と軌を一にする感慨を持っていたと推測出来るからだ。しかも、その告白より丁度半年前の前述した 1846 年 11 月 24 日付、そして、前段のエピソードより 9 ヶ月程前の、前述の 1845 年 5 月 20 日付の日記から分かるように、彼の経済的状況はとても満足出来るものではなかったし、役者の社会的地位も彼の努力にも拘わらず未だに「心許ない」ものだった。現に 1846 年 4 月 20 日付の日記には、Dublin から彼の許に送られた小包の宛名書きに、“Esq.”という敬称でなく“Mr.”が使われていた。彼はその小包を開封することなく燃やした (*Dia.* 2: 335)。

ところが一方、Forster の口の利き方に纏わるエピソードの頃 (1846 年) には、Dickens や Forster は 30 代半ばにあって仕事にも脂が乗って来ていた。既に 6 編の小説を上梓していた Dickens は、前年から準備が始まっていた *Daily News* 紙 (1846 年 1 月 21 日発刊) の文芸欄の編集者として意気込んで働き出すとともに (*Letters* 4: 444-45n)、勢い余って Forster 等を巻き込んだ素人演劇 (amateur theatrical) にも没入してはしゃぎまくり、書簡で Macready に助言を得ようなどとしている (*Letters* 4: 348, 368)。Forster の方は 1843 年には正式に法廷弁護士の資格を取り、“John Forster, Barrister-at-Law” とか、“John Forster of the Inner Temple” と署名して悦に入ることもあった (Davies 81-82)。彼はまた *Foreign Quarterly Review* の編集者を経験するとともに、1840 年代の中頃には *Examiner* の実質的な編集者となり (1847 年 11 月から正式に就任)、1846 年 2 月には Dickens の後を引き

継いで *Daily News* 紙の編集者となっている (*Dia.* 2: 321-22 [1846年2月12日付])。彼が文学と演劇の世界の多くの人々の間で、精力的に動き回っていたことも忘れる訳にはいかない。

こうした Dickens と Forster の活動に対する Macready の反応は、必ずしも全面的に好意的という訳ではなかった。例えば、二人が *Daily News* 紙発刊と関わっていることを初めて耳にした時、彼はそのような日刊紙が今ある以上に必要だと思っている人がどれ程いるのかと懸念し、その新聞の将来を憂慮している (*Dia.* 2: 307 [1845年10月19日付])。案の定 *Daily News* 紙発刊時から数えて3週間もしない裡に、Dickens がその編集者の職を放棄すると Forster がその後を引き継いだ。Forster 自身の口からその引き継ぎの事を聞いた Macready は、彼が「大得意」(“elated”) のようだったと批判めいた感想を記すとともに、彼の力では成功の見込みは余りないだろうと予言している (*Dia.* 2: 321-22 [1846年2月12日付])。

Dickens を中心とする素人演劇への Macready の反応も、かなり冷やかなものだった。素人演劇 *Every Man in his Humour* を観た Macready は、Kitely 役の Forster は良い所もあったが、その公演は全体的には「とても退屈なもの」(“a very dull business”) だったと歯に衣を着せぬ評価を下しているし (*Dia.* 2: 304 [1845年9月20日付])、1845年11月15日の彼等の公演を観た際も、自分達の演技力について「(素人役者達は)完全に思い違いをしているように思う」(“[Amateur players] seem to me under a perfect delusion”) と日記に記している (*Dia.* 2: 310)。さらに彼は翌年の1月2日付の日記で、Dickens を初めとする素人役者達の「大騒ぎ」(“fuss”) は、「ばかげている」(“ludicrous”) と最終的に断罪した (*Dia.* 2: 318)。

当時の Dickens の創作活動への Macready の評価もさほど芳しいものではなかった。1846年1月22日付の彼の日記には、*Daily News* 紙上で連載が始まったばかりの Dickens の紀行文(“Foreign Letters” と題された *Pictures from Italy* に結実するもの) に対して (*Letters* 4: 475n)、現実の世界の出来事を厳しく報道する新聞に載せるには、その内容が「余りにも気楽過

ざる」(“too familiar”) という苦言と、*Daily News* 紙も船出したばかりだから「門出の景気付け」(“a starting cheer”) として、祝いの書簡だけは Dickens 宛に送っておいたという言葉が窺われる (*Dia.* 2: 320)。

1846年2月14日に発する Macready と Forster との対立は、暫らく続いた後、Forster の Macready への和解申し込みの書簡送付を契機にして、同年5月31日に一応の決着が付けられる (*Dia.* 2: 339 [1846年5月31日付])。ここで一つ注目しておかなければならないことがある。それは1845年10月6日付の日記で、Macready はある役者の成功談に言及するとともに、自分の「他人を羨む利己的な感情に走る傾向」(“the tendency to selfish and envious feelings”) を強く反省していることだ (*Dia.* 2: 306)。一代の名優となった Macready がこのような感慨に耽るとは驚きだが、それが老いを意識した52歳の生身の人間としての彼の本心だったのだろう。このことが上述した Dickens や Forster の活動への彼の評価にも、何らかの影響を与えたと推察することは許されるのではないだろうか。少なくとも彼の Rugby 校時代の弁護士になる夢のことを思い起こせば、法廷弁護士としての資格を得た後で Forster が事あるごとにそれを見せびらかす姿を (Davies 82)、彼が平静に見過すことが出来たとは思えない。論より証拠、Macready が Forster のその資格取得のことについて日記内で言及することは一切なかった。

(3)

前章では限定された期間における Dickens と Forster の活動に対する Macready の評価を紹介したが、本章では時間の枠を拡げて、主に Dickens の活動と人間性に対する彼の意見を検証してみよう。

Macready の日記全体を読み通したところで筆者の記憶に最も印象深く残ったのは、Dickens の小説と William Makepeace Thackeray (1811-1863) の小説を比較した部分だ。青年期において Dickens の小説の挿絵画家として落選したことのある Thackeray は (*Letters* 1: 305n)、1847年1月から1848

年7月まで月刊分冊で発表された *Vanity Fair* を以って、大小説家の仲間入りをした。どちらかと言うと Thackeray に心証を害されていた Macready だったが、彼に贈呈されたその小説を読み進めて行く裡に、その作品がベソスという点では Dickens の作品に劣るものの、文体的には「極めて賢い」 (“extremely clever”) とか、教育を受けた者が備える「言語の自由奔放さ」 (“the freedom in the language”) という点では Dickens に勝っているとか (*Dia.* 2: 417-18 [1849年1月31日付])、真実を真正面から捉えたいと思っている自分にとっては「とてもためになる」 (“most instructive”)、といった評価をするようになる (*Dia.* 2: 418 [同年2月1日付])。1849年2月3日に *Vanity Fair* を読了した時には、彼の Thackeray への評価は急上昇し、その小説は当代一だとすら言い切っている。Dickens には悪いが、「真実は変えられない」 (“the truth is the truth”) と彼は日記に記した (*Dia.* 2: 418 [1849年2月3日付])。

ここで Macready が日記中で部分的にでも低い評価を与えた Dickens の作品を見てみよう。1851年2月で日記が終了しているのでその時点迄の作品ということになるが、年代順に挙げると *The Lamplighter*、*American Notes*、*Martin Chuzzlewit*、*Dombey and Son*、そして、*David Copperfield* ということになる。勿論 Macready の散文に対する評価は半ば素人の個人的なものであり、客観的なものではない。

先ず20代の Dickens が Forster に無理やり押されて、Macready のために舞台用として執筆した笑劇 *The Lamplighter* だが、Macready はその笑劇の台本を読んで、「対話」 (“dialogue”) は良いが、どうも「筋の貧弱さ」 (“the meagreness of the plot”) が気に懸かると判断し、一応りハーサルを終えた末に受入れを拒否している (*Dia.* 1: 480 [1838年12月5日付]、481-82 [同年12月13日付])。Macready はこの一件の際、Forster が作品の善し悪しも分からぬままに Dickens を「駆り立てて」 (“goad”) 作品を書かせ、それを自分 (Macready) に押し付ける「全く無分別な友人」 (“the most indiscreet friend”) であり、「ぶちこわし屋」 (“marplot”) だと憤っている (*Dia.* 1: 481

[同年 12 月 11 日付])。Dickens の America 体験記 *American Notes* と小説 *Martin Chuzzlewit* (主人公 Martin の America 滞在筋立ての一部) の場合、当時 Macready が America 最良だったという事実が、彼の作品評価に影響を与えた。² Dickens に *American Notes* の序章を貰いそれを読んだ Macready は、「気に入らない」(“I do not like it.”) と即断している (*Dia.* 2: 181 [1842 年 7 月 29 日付])。その文体と素材が気に入らないというのだ (*Dia.* 2: 182 [同年 8 月 11 日付])。 *Martin Chuzzlewit* の Martin の America 到着の分冊を読んだ時にも Macready は、 *American Notes* への反応と同様に、America をそのように描くのは Dickens 自身のためにならないと記した (*Dia.* 2: 215 [1843 年 7 月 1 日付])。 *Martin Chuzzlewit* の 1843 年 9 月号に到って彼は初めて「力強い」(“powerful”) という評価をしているのだが、それでも尚その内容が「辛辣だ」(“bitter”) と付け加えている (*Dia.* 2: 218 [1843 年 9 月 2 日付])。

次に *Dombey and Son* と *David Copperfield* に対する Macready の評価を見てみよう。 *Dombey and Son* の第 5 分冊位までの Macready の評価は高い。例えば彼は、第 4 分冊は「極めて力強く書かれている」(“most powerfully written”) という感想を表明しているし (*Dia.* 2: 353 [1847 年 1 月 3 日付])、幼い Paul Dombey の病の進行と死とを扱う第 5 分冊に関しては、「天才と美とに溢れている」(“full of genius and beauty”) と絶賛している (*Dia.* 2: 358 [同年 2 月 16 日付])。1840 年に愛娘 Joan (Harriet Joanna Macready) と死別した Macready だから (*Dia.* 2: 99 [1840 年 11 月 25 日付])、Paul の夭逝という筋立てが彼のその小説への評価を後押ししたとも考えられる。ところが *Dombey and Son* の 1847 年 12 月号への彼の評価は、「曖昧で面白くない」(“obscure and heavy”) という辛辣なものに変貌している (*Dia.* 2: 379 [1847 年 11 月 30 日付])。おまけに、 *Dombey and Son* への彼の評価を Dickens が確かめようとするかに見えたが、正直な感想は言えないので彼との会話の中では、その小説の話をするのを避けたとまで言っている (*Dia.* 2: 380 [1847 年 12 月 5 日付])。 *David Copperfield* の場合 Macready は、最後の

方の分冊に関しては Dickens の天才的な能力を認め非常に高い評価をしているものの (*Dia.* 2:471 [1850年10月3日付])、前半の分冊に関しては評価が揺れている。1849年11月30日付の日記にはその日読んだ分冊が、「余り面白くも感動させることもない」(“does not interest or move me much”) と記されている (*Dia.* 2: 436)。

誰とでも喧嘩の出来た Macready が Dickens だけを例外としたという Moss の意見にも拘わらず、Macready は心の中で Dickens の創作活動に対してこれだけの非を唱えていたのだ。因に、*Vanity Fair* 発刊後に脅威となった Thackeray への Dickens の敵愾心は、Thackeray が常宿にしていた Dublin の Shelbourne Hotel の利用の仕方にも窺える程のものになって行った。1858年8月から1869年1月までの5度の Dublin 滞在の裡で、Dickens がそのホテルに宿泊したのは Pilgrim 版の書簡集に拠れば、Thackeray (1863年に他界) 没後の2、3回だけだった (*Letters* 8: 632 [1858年8月23日付 Angela Burdett Coutts 宛], 642 [同年8月29日付 Georgina Hogarth 宛]; *Letters* 11: 333 [1867年3月15日付—Georgina Hogarth 宛], 341 [同年3月22日付—Georgina Hogarth 宛]; *Letters* 12: 272 [1869年1月10日付—W. J. Farrer 宛] et passim)。³

Dickens の創作活動の一部への Macready の批判的態度のことはこの位にして、それ以外の範疇の事柄で Macready が非としたものを次に検証したい。先ず、上述した Dickens の Thackeray への対抗意識のことから始めよう。Dickens は1850年の王立美術院の晩餐会に招待されたものの、Thackeray が招待された前年の晩餐会に自分が呼ばれなかったことを理由に、その招待を断った。画家 Daniel Maclise からこのことを聞いた Macready は、「我々の誰より賢い人もなんと弱いことか」(“How weak are the wisest of us.”) と呆れている (*Dia.* 2: 466 [1850年6月4日付])。Macready はこのエピソードでは「誰より賢い人」と、Dickens を賞賛することによって彼への批判をオブラートでくるんでいる。これは、*American Notes* や *Martin Chuzzlewit* の背景にあった Dickens の America 批判への批判をした後、「嗚

呼、最も偉大なる人も所詮人にすぎない」(“[A]las! The greatest man is but a man!”) と日記に記した時の、Macready の Dickens へのスタンスと軌を一にする (*Dia.* 2: 266 [1844 年 3 月 12 日付])。

Macready は上述のものとは異なるより厳格なスタンスを採って、Dickens を批判することもあった。例えばそのような赤裸々な批判が 1840 年に、出版業者 Richard Bentley (Macready の日記の編者 Toynbee は Bentley と誤読している [*Letters* 2: 32n]) 相手の契約不履行問題に対する Dickens の姿勢に向けられた。Dickens は前年 2 月に Bentley と、1 年程の裡に小説 (*Barnaby Rudge*) を執筆するという契約を交わしたものの、それを反故にしようとしたのだ。Macready は「(Dickens) が全く悪い」(“[Dickens] is quite in the wrong”) と言うとともに、自分の才能が当時自分が思っていたよりも「金になる」(“lucrative”) ことが分かると、彼はその約束を果たすことを拒否したと非難している (*Dia.* 2: 45-46 [1840 年 2 月 23 日付—Pilgrim 版の書簡集の編者に拠ると 23 日付ではなく 22 日付 {*Letters* 2: 32hn—同年 2 月 23 日付(推定) Macready 宛}])。もっとも、赤貧を体験したことのある上昇指向の Dickens は文壇に受け入れられたものの、当時依然として自分の将来への不安を持ち続けていた訳で、Bentley とのこのような軋轢を一概に批判する訳にはいかないと筆者は思うのだが。因に、Dickens が経済的余裕を感じ始めたのは *Dombey and Son* (1846 年 6 月-1848 年 3 月執筆) の頃と思われる。

Macready が Dickens の意図したことに反対したケースを、もう二例だけ取り上げておこう。その一つは Dickens が 1841 年に、破廉恥な借財を繰り返す父 John の行動の阻止を実質的な目的とする公告文を、*Times* 紙を初めとする London の主要な新聞に掲載しようとしたことだ。このことを Forster から直前に聞いた Macready は彼 (Forster) に、「(Dickens は) 決して (そんなことを) すべきでない」(“[Dickens] ought not to do [so]”) と伝えた (*Dia.* 2:126 [1841 年 3 月 6 日付])。前述したように Dickens の父親同様に債務者監獄入りを経験したことのある父親 (1829 年没) を持つ Macready の、こ

の助言を Forster から聞いたに違いない Dickens は、それでも初志貫徹してしまった。皮肉なことに Macready は、その 1 年程後の 1842 年(Dickens の最初の America 滞在中) に John から借財を請われ、相談した Forster が 10 ポンドで十分だと言ったものの Dickens の父親だからという理由で、結局 20 ポンド送金した。おまけに Macready は John に、その件を Dickens には内緒にするよう頼んでもいる (*Dia.* 2: 158 [1842 年 2 月 21 日付])。

もう一つの事例においても Dickens は自分の説を曲げなかった。それは 1840 年の後半に巷に流れていた「Dickens 遂に狂う」という噂への反論を、*Master Humphrey's Clock* の第一巻の序文に Dickens が入れようとしたことだ。Macready はこのことについても 1840 年 9 月に Forster から意見を求められ、「色々と(その序文に) 異議を唱えておいた」(“I made objections [to the preface]”) と日記に書き残している(*Dia.* 2: 80 [1840 年 9 月 13 日付])。この年に Dickens が避暑地 Broadstairs で、友人 Angus Fletcher や知人 Emma Picken を巻き込んで、その噂を地で行くかのような振る舞いをやらかしたことは良く知られている (Christian, “Reminiscences” 338. Qtd. in *Letters* 2: 127- 28n)。

(4)

Macready の日記には Dickens と Forster が衝突する度に、二人のどちらかから Macready への何らかの訴えかけがあったことが記されている。そこで本章では、Macready 自身が Forster との関係において時に激しい衝突の当事者となっていたことを踏まえながら、前章での検証を敷衍する形で Dickens と Forster の相克に対する彼の姿勢について少し触れてみよう。本章ではさらに、Dickens が非とした Macready の一側面についても検証したい。

1840 年 8 月 16 日付の Macready の日記に拠ると、Dickens 家での夕食会に Forster や Maclise とともに招かれた彼は、「とても痛ましい場面」(“a most painful scene”) と彼が呼ぶ局面に遭遇している。食後の談話に熱中し

た Forster がいつものように興奮して、Dickens を相手に私事に触れる言い争いを始めたのだ。⁴ Macready は、Dickens が我を忘れる程に「激情に駆られ」(“flew into so violent a passion”)、Forster に自分の家から出て行ってくれと命じたと場面描写している。両者にとって大切な友情を、一時の憤激に負けて失うのは愚かだという Macready の説得に、一応その場は収まった (*Dia.* 2: 74)。しかしその4日後に Forster のことで Dickens と話す機会があった Macready は、二人の Forster 観が一致していることを見出す。つまり Forster は他人の前で「保護者」(“patron”) 振るために、「横柄な物の言い方」(“a supercilious tone”) をするような人間だという訳だ (*Dia.* 2: 74-75 [1840年8月20日付])。

Macready と Dickens との間の Forster 観の一致ということ为背景にして眺めると、少し滑稽なエピソードが二つある。その二つのエピソードは三者の当時の相対的な関係を如実に表すとともに、その場の様子を我々の眼前に迫らせてくれる類のものだ。その一つはある晩の夕食会の最中のことだ。Forster が Macready の披露した幾つかの意見に対して「(あなた) らしからぬ」(“unworthy of [you]”) 意見だと、「極めて不作法」(“in so rude a manner”) で「生意気な」(“impertinent”) 物言いをすると、自分で言えば良いものを Dickens はいかにも Macready に、「憤懣やる方ない言葉を (Forster) に返して」(“reply very angrily to [Forster]”) 欲しそうな顔をしたというのだ (*Dia.* 2: 321 [1846年2月5日付])。

もう一つは、1848年5月から8月まで続いた Macready と Forster との間の大きな衝突の最中のものだ。この時の衝突の様相はいつもと違って、Forster の Macready に対する遣恨らしきものが特徴となっている。論より証拠 6月16日付の Macready の日記には、自分は Forster に友好的な態度を取っているのに、Forster の自分への「気紛れ」(“caprice”) が「手に負えない」(“beyond all management”) とある (*Dia.* 2: 395)。明示されてはいないがどうやら主な原因は、5月21日付の日記に記された *Examiner* (前述したように 1847年11月から Forster が編集者となっている) への、「退屈」

（“dull”）で「断固とした意図」（“determined purpose”）に欠けるという Macready の批判的意見と関わりがありそうだ（*Dia.* 2: 390）。こういう批判をすることが相手への友好的な態度と言えるのかどうか分からないが、ともかく Forster は直接的ないしは間接的にその Macready の批判に接し、臍を曲げたようだ。この衝突が横行していた 7 月 9 日付の日記に拠ると、その日 Dickens と会った Macready が Forster のその頃の行状を説明すると、Dickens は自分自身 Forster の気性を熟知しており、彼が Macready に本性を露呈してくれたことで満足した、と答えたという（*Dia.* 2: 399）。状況が状況だけにこの時は前段のエピソードと立場が逆転し、どちらかと言うと Macready の方が Dickens を介して Forster の短所を確認し、自己正当化しようとした形跡がある。

Macready が Forster と Dickens の両者を大いに持て余したケースは、件の Dickens 家での夕食会後のもの以外にもう一つある。1847 年の 10 月半ばから 12 月半ばまで続いたと言われる Dickens と Forster の反目は（Johnson: 621-22）、彼等の軋轢の歴史の裡でも最も深刻なものだった。Forster は、「（自分）と Dickens の長く親しい関係が終わるか、大変に疎なものとなりそうだ」（“the long and intimate relationship between [myself] and Dickens [is] likely to terminate or very much relax”）と言い出すし（*Dia.* 2: 376 [1847 年 11 月 4 日付]）、Dickens の方も二人の関係修復を勧める Macready の説得にも拘わらず、「（Macready が）不適切だと思ふ程に意を決してしまって」（“more stiff than [Macready] thought quite right”）いたようだ（*Dia.* 2: 374 [1847 年 10 月 18 日付]）。Macready は、長所と短所を共に持ち合わせた二人が今迄「余りにも親密に過ぎた」（“too familiar”）ことが、このような対立をもたらしたと判断している。その上で彼は Dickens の Forster に対する気持ちも理解出来るが、彼（Dickens）が「甘やかされ過ぎ」（“spoiled”）で「気まぐれ」（“capricious”）になっていなければ良いかと願っている（*Dia.* 2: 376 [1847 年 11 月 4 日付]）。Macready がこのように願わなければならないということは取りも直さず、出会ってから 10 年以上が経ったその時点

でも、Dickens の人格への彼の信頼が確立されていなかったことを意味している。

もっとも Macready は、上述の軋轢の原因となったと思われる Dickens から Forster への過去の告知、即ち Dickens の 12 歳の時の Warren 靴墨工場での労働体験を核とする過去の告知が、当時かなり進行していたことを知らなかった。Dickens が生前にその告知をしたのは妻 Catherine と Forster だけだった (Burgis xxi)。表面的には和気藹々とした Dickens と Macready の間柄だったが、Dickens はこの年長の友には過去の告知をしなかったのだ。Dickens が Forster の伝記作家としての位置を意識したこと、そして、彼が骨肉、殊に、父親を作中人物（好ましからざると否とに関わらず）のモデルとしたことを許さなかった Forster に対して、弁明する必要があったことがこの差を生んだかもしれない (Forster 3: 8-9)。しかしやはり、人間同士の繋がりや度合いの相違とも考えられる。つまり Macready が Dickens から距離を置いたのと同様に、Dickens も Macready に対して一定の距離を保っていたのだ。

(5)

Macready に対して上述のスタンスを取っていた Dickens は、その年長の友人が引退して Sherborne に定住する前に二度、彼のことを Forster 宛と Maclise 宛の書簡中で「厳格さん」(“ Grim ”あるいは“ Grims ”)と呼んでいる (*Letters* 2: 318&n [1841 年 6 月 30 日付 - Forster 宛]; 330&n [同年 7 月 12 日付 - Maclise 宛])。“grim” の定義には「厳格な」の他にも、「(表情・態度)が険しい」とか、「不気味な」というもの迄ある。⁵ Dickens が件の期間に、Macready に対して直接に「厳格さん」と呼びかけた書簡は皆無であるにも拘わらず、彼は Sherborne 定住後の Macready に宛てた一通の書簡の冒頭で、「怒りん坊の裡でも最も親愛なる人よ」(“Dearest of the Irascibles”)と呼びかけている (*Letters* 7: 477 [1854 年 12 月 6 日付])。Dickens はまたもう一通の Macready 宛の書簡で、次の長編小

説では主人公を「性急で短気な類の、時としてすごく厳格になり、しかも堅い意志を備えた人物」(“an impetuous passionate sort of fellow *devilish grim*, upon occasion and of an iron purpose (my italics)”) にしようと思うが、「滑稽」(“[d]roll”) ではないかと冷やかし気味に尋ねている (*Letters* 7: 452 [1854年11月1日付])。「厳格さん」とか「怒りん坊」という呼び名は、友人に宛てた書簡という冗談が許される気楽な環境の中で使用されたものの、Dickens が Macready の性格をどのように捉えていたかということを実に表している。

Macready は時として表面的に「人を寄せ付けない」(“forbidding”) ことがあったが、Dickens は彼の心の奥底に「高潔で寛大で公正な精神」(“high-minded, generous, just spirit”) を見出し、尊敬していたと J. W. T. Ley は述べている(201)。筆者は Ley の意見を全面的には受容出来ない。というのは Dickens は自分の文学活動を評価しない者に対しては、当然ながら厳しい態度を取った作家だったからだ。例えば、1845年12月27日付の Macready の日記に拠れば、創作活動において「Dickens が余りにも自説に執着するとともに自画自賛に徹しているの、(私は) 相談役としては用無しですよ。．．．(Dickens は) 自分自身への批判を直視することを(拒絶しています)」(“Dickens [is] so intensely fixed on his own opinions and in his admiration of his works . . . that [I am] useless to him as a counsel . . . , and . . . [Dickens refuses] to see criticisms on himself”) と、Forster が半信半疑の Macready にこぼしている (*Dia.* 2: 316 [1845年12月27日付])。洞察力を備えた「比肩する者なき」Dickens は、Macready がその「公正な精神」で以って自分ではなく、Thackeray の方を小説家としてより高く買っていたことに気付いていたと筆者は思う。何故ならば、*Vanity Fair* 人気で Thackeray の株が上がってからの Dickens は、Thackeray への他者の評価に以前よりも鋭敏になり(Johnson: 615; Williams 78)、彼への敵愾心を募らせた筈だからだ。Thackeray 自身、*Vanity Fair* が評判になっていた頃の 1847年7月2日付の Carmichael-Smyth 夫人宛の書簡で、回りの者達、例えば

Douglas Jerrold、Harrison Ainsworth、Forster、Edward Bulwer-Lytton 等の自分への対応の悪化について記すとともに、「Dickens は私に不信を抱いています」(“Dickens mistrusts me”) と伝えている (Qtd. in Johnson: 615)。前述したように Macready は Thackeray を絶賛していた位だから、隠そうとしても日常的な長い交際の中で思わず顔にそれが表われたこともあっただろう。そしてこのことは Thackeray に纏わることでなく、本稿で紹介した Macready の Dickens の創作活動への他の批判についても言えることなのだ。「怒りん坊」という呼び名は冗談で使われたにしても、Ley の説明する意味での Dickens の Macready への姿勢からは、生まれ得なかったものように思われる。⁶

引退してからの Macready への Dickens の姿勢の、一側面を垣間見ることの出来るエピソードをもう一つ紹介しよう。Dickens は 1858 年 1 月 6 日付の Macready に宛てた書簡で、彼 (Macready) の 23 歳の次女 Catherine 作のクリスマスを主題とする詩を、*Household Words* に掲載することを拒否している (*Letters* 8: 502&n)。他の詩人達の同一の主題の詩が既に複数採用されているので、1 年程待ってもらわなければならないという訳だが、これは体の良いお断りの返事と言って良い。1856 年の 7 月と 8 月、そして、11 月には彼女の詩が同誌に採用されたことがあったが、どうもそれは Macready の顔を立ててのことだったようだ。結局そのクリスマスを主題とする詩が *Household Words* 誌上で発表されることはなかったし、その後 *All the Year Round* 時代の 1866 年 3 月と 4 月に彼女の詩がもう二回掲載されるまで、彼女の作品は採用されなかった。⁷このことは必然的に 1858 年頃には、Dickens の Macready の顔を立てようという気持ちが萎え始めていたことを意味している。去るものは日々に疎しいということもあっただろうが、詰る所は前述した Dickens の、Macready との距離がさらに広がったということであり、Dickens にも言い分があったということなのだ。このように表面的には友好的な関係を維持していたものの、Dickens が Macready を「怒りん坊」とか「厳格さん」と呼ぶだけの下地は現に存在したのだ。因

に 1858 年という年は、Dickens が Macready の次女と同名の妻 Catherine との別居騒動（前年から始まった）で家庭生活を自ら泥沼状態に陥れ、火宅の人としての精神的な嵐に突入した年だ。

（結び）

以上 Macready と Dickens、そして、Forster の相互的な関係における顕著な部分のみを材料に、Macready の眼を通して見えて来る Dickens 像の一部を確認するとともに、一筋縄では行かないこれら三つの個性の衝突から生じた乱波形を検証した。Macready と Forster との関係はともかく Macready と Dickens との関係を論ずるに足らずには、幾分意地悪な視角に偏り過ぎたかもしれない。しかし一見したところ尻ばかりの印象を与える彼等（Macready と Dickens）の関係に潜む、不連続線を探るための方途として止むを得なかった。

舞台を降りるまで自分の演技を反省し続けた Macready は、世間でもてはやされていた Dickens の在り方を厳しい眼で観察し続けた。1847 年に起きた Dickens と Forster の激しい軋轢に直面した際、Dickens が「甘やかされ過ぎて」、「気まぐれ」になっていなければ良いがと日記中で危惧する彼の姿は、時に Dickens を天才と呼ぶ彼の姿よりも印象的だ。Bentley によって契約不履行の謗りを受けた Dickens を、芸術と人生の先輩として直截に断罪した際の彼の判断力は、きっとその年下の友人にとって陰に陽に役立つ筈だ。しかし、Macready 等の反対を振り切って、父親の借財癖を牽制するための告知文を Dickens が諸新聞に敢えて掲載したように、あるいはまた彼が「Dickens 遂に狂う」の噂を否定するための序文を、*Master Humphrey's Clock* の第一巻に差し挟んでしまったように、Macready の善意が常に報われるということにはなかった。それにしても Macready よりも 3 年前に他界した Dickens は、その年上の友人が父 John に送った 20 ポンドの金のことを冥土で知った時、彼に対してどれ程の感謝の念を捧げたのだろう。

(注)

本稿で使用した William Toynbee 編の William Charles Macready の日記は、*Dia.*と略記する。また Charles Dickens の書簡集は Pilgrim 版のものを使用した。本稿ではその書簡集を *Letters* と略記する。

1. もっとも Macready の愛娘達、即ち Joan (1840 年 11 月没) と Nina (Christina Macready 1850 年 2 月没) の死の際の Forster の心配りに彼が感謝した結果、二人の関係が随分と温かなものとなったこともあるし (*Dia.* 2: 100 [1840 年 11 月 26 日付], 105 [同年 11 月 30 日付], 456-58 [1850 年 2 月 24 日付])、Nina の死から 1 ヶ月程して誕生した 5 男を、Macready が Jonathan Forster Christian Macready と名付けたことは、特記に値する (*Dia.* 2: 463-64 [1850 年 4 月 7 日付])。それに Forster の出自を当て擦って、「肉屋の小倅 John Forster」(“John Forster, the butcher-boy”) と彼を呼ぶ連中が現われた時に、Macready は「その下劣な輩達」(“the dirty fellows”) の扱いに注意するよう助言したこともある (*Dia.* 1: 427 [1837 年 11 月 24 日付])。
2. 死者を出す程の混乱に巻き込まれた 1848 年 9 月から 1849 年 5 月までの America 公演を機に、Macready はその国への評価を逆転させた (*Dia.* 2: 404 [1848 年 9 月 26 日付], 424-28 [1849 年 5 月 10 日付], 428-29 [同年 5 月 15 日付] et passim)。
3. 1984 年 1 月に Shelbourne Hotel に宿泊した際、筆者はそのホテルの歴史を紹介するブックレットを広報部(?)のスタッフから頂戴した。そのブックレットには Thackeray と Shelbourne Hotel の縁についての言及は見受けられたが、Dickens への言及は一切なかった。
4. 憶測ではあるが恐らく、当時 London から遠く離れた Alphington での暮らしを、Dickens に強制されていた彼の父 John に関わる事柄であり、Dickens は 10 日程前にその地への訪問を終えて帰宅したばかりだ

った (*Letters* 2: 106&n [1840年7月25日付—Angela Burdett Couetts 宛])。

5. Forster は Dickens 伝で、“Grim” は「(Macready の) 個人的特性のいずれにも全く当て嵌まることのない綽名」(“an epithet quite inapplicable to any of [Macready’s] personal qualities”) だと述べている (1: 236)。この Dickens 伝の第一巻が刊行された 1872 年には Macready (1873 年に他界) が健在だったし、Dickens は彼に宛てた書簡中では勿論この綽名を使用していないので、このコメントが必要だった。
6. それでは Dickens と Macready の一見友好的に見える関係が、Dickens の死に到る迄維持されたのは何故かということになる。筆者はその主な理由は、不甲斐無い父 John との軋轢の中で父親不在の感覚を抱えていた青年時代の Dickens が、Macready の存在にそれを癒すものを見出し、Peter Ackroyd も指摘したように彼を「もう一人の父親」(“another father”) として捉えたこと(210)、そしてまた彼等の関係が個人レベルのものであると同時に、互いの家での会食の繰り返し、あるいは互いの家族の慶弔に関わる事柄における心情のやりとり等々の形で為された、家族レベルのものでもあったことだと思う (*Dia.* 1: 455 [1838年4月29日付], 466 [1838年6月24日付]; *Dia.* 2: 21 [1839年8月7日付], 100 [1840年11月26日付], 491 [1851年2月2日付]; *Letters* 1: 571&n [1839年7月26日付 Macready 宛] et passim)。1842年1月から6月迄の Dickens 夫妻の America 滞在の際には、彼等の子供達の世話を Macready 家が随分と手助けしている (*Letters* 3: 8&n [1842年1月3日付 Frederick Dickens 宛])。
7. *Household Words* 誌上に掲載された Catherine Macready の詩は、“The Shadow of the Hand” (1856年7月26日号)、“The Angel of Love” (同年8月30日号)、“Springs in the Desert” (同年11月8日号) であり、*All the Year Round* 誌上に掲載されたのは “Nemesis” (1866年3月17日号) と “The Bird of Paradise” (同年4月7日号)

である。

(参考文献)

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Sinclair-Stevenson, 1990.
- Burgis, Nina. Introduction. *David Copperfield*. By Charles Dickens. Oxford: Clarendon, 1981. xv-lxii.
- Christian, Eleanor E. "Reminiscences of Charles Dickens: From a Young Lady's Diary." *Englishwoman's Domestic Magazine* 10 (1871): 336-44.
- Davies, James A. *John Forster: A Literary Life*. Totowa, NJ: Barnes, 1983.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. The Pilgrim Edition. 12 vols. Oxford: Clarendon, 1965-2002.
- Downer, Alan S. *The Eminent Tragedian William Charles Macready*. Cambridge, Mass. Harvard UP, 1966.
- Forster John. *The Life of Charles Dickens*. London: Chapman, 1874. 3 vols. 1872-74.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 2. Boston: Little, 1952. 2 vols.
- Ley, J. W. T. "Dickens and Macready: An Undivided Friendship." *Dickensian* 9 (1913): 201-06.
- Macready, William Charles. *The Diaries of William Charles Macready 1833-1851*. 2 vols. Ed. William Toynbee. London: Chapman, 1912.
- Moss, Sidney P. *Charles Dickens' Quarrel with America*. Troy, NY: Whitston, 1984.
- Williams, Charles Riddell. "The Personal Relations of Dickens and

Thackeray.” *Dickensian* 35 (1938): 75-91.

出典：『アカデミア 文学・語学編』（南山大学）77（January 2005）